門松の想い出

藤　田　恒　春

1

わたしの田舎は、生まれたころは滋賀県栗太郡常盤村大字志那字垣根（現滋賀県草津市志那町［明治以前は近江国栗太郡志那村］）と言い湖辺の寒村であった。明治6（1873）年の村の概観はつぎのとおりである。反別29町1反3畝7歩、戸数82軒、人口384人（男190・女194人）であった。因みに村高は天保郷帳で234石777合の小村にすぎず、しかも湖辺ということもあり下田が多く生産力は高くはなかったようだ(「春日力氏所蔵文書」)。

もっとも、近世までは対岸坂本や大津への渡し場として知られ、古くは「源平盛衰記」に現れるなど中世の古記録類によく見られ、なかでも永禄11(1586）年9月24日、織田信長が足利義昭を奉じて上洛すべく東山道を守山から志那へ至り（この道は志那街道と呼ばれていた）大津へ渡海したことで知られている。また、蓮の名所として知られていたため中世では京都の公家や僧侶たちが見物にやってきたことが日記などに散見される。現在、サントリー美術館が所蔵する「近江名所図絵」に描かれている蓮と寺院（蓮海寺）は、志那村に該当すると推定されている。慶長8（1603）年6月25日、徳川家康も観蓮のためやってきている（東京大学史料編纂所架蔵写真帳「時慶卿記」五)。17世紀初期までは、蓮の名所であると同時によく利用された渡し場であった。「志那津浦」は「不死（しなず）」に通じるとのことで家康が喜んだという伝承も残されている。

2

叙上のような歴史的地理的環境にあったためか村には古い習慣などが多く残されていたように思われるのである。そのひとつがわが家の「門松」である。

門松といっても玄関まえ（門口（かどぐち））に高さ1㍍から1㍍50㌢足らずの松の枝を細い青竹を地中にたて、それに松の枝を荒縄で結わえつけるだけの至ってシンプルなものである。山はないので松や注連飾りの裏白などは、町で買い求めるようであった。親戚のものが山へ取りに行っていたこともあるようだ。

父は県庁に勤めていたので正月迎えの作業は当然のこととして御用納め後で、注連縄綯（な）いは、28か29日ごろの夜なべ仕事であったように思われる。注連縄は秋の取り入れで別にしていた稲藁を使って綯っていた。女の仕事ではなかった。

大晦日の午後3時ころから門松を立て始める。これは、村の産土神である志那神社（志那津彦命・志那津姫命・伊吹戸主命を祭神とする。風神で渡しの村に似合った祭神である）の神主さんが夕方、各戸をまわり神棚に新しいお札を置いていくためであったからではないかと思われる。立てたばかりの門口の門松のあいだを最初に村の神主さんが訪なうのであった。ここから正月が始まるのであったろう。

門松は門口に2本、裏口（勝手口）に1本、小屋の出入口に1本宛、便所に1本、川門（かわと）（湖辺の地域は多くの家で田船を持っていて、それを家の前の川に繋いでいた）に1本、井戸に1本立てていた。この本数は、川門と井戸を除けば節分の鬼の面刺しの数と同じであった。川門と井戸を除けばウチとソトを分かつ空間に門松を立てたのである。門口とはいえ乾いた地面に青竹を打ち込むのは一寸した力仕事で、あらかじめ鉄の棒で穴を少しあけていた。そこに青竹を打ち込み、それに松を結わえるのだが、それを手伝うのが子供の役目であった。

これより前にカドを掃き、注連縄を飾り、そして日没頃には神棚にお燈明とお神酒を供え、大晦日の夕飯に先だって神棚に供えるのと同じように門松のてっぺんに炊き立てのご飯と根元に土器（かわらけ）に元旦の雑煮のために用意した汁に大根・親頭（おやがしら）（芋魁（かしらいも））をサイコロ型に切ったものを二三ケ入れて置いてまわるのがこれまた子供の役目であった。

門松のうえにご飯を一口ずつおいてまわるのが実に不思議であった。正直言って大晦日の夕

飯どき、寒いのにどうしてこんなことをするのかと、永らく疑問に思ったままであった。まして朝夕二度宛三カ日続けるのである。村のなかでこんなことを続けているのは数軒しかなかったように思われる。土器をおくことは70年代に、門松のうえにご飯を置くことは80年代後半に潰えてしまった。

わが家は本家の分家（インキョと呼ばれていた）であるが、本家とてせいぜい天保期ころまでしか遡ることはできず、村のなかでは小百姓であった。父は青年期、農家の二男坊であったことから1946（昭和21）年まで外地にいたのである。これらのしきたりを子供のときに植え付けられたのであろうか。子供心から見ても古くさいしきたりなどを墨守していたように思われた。本家だけがとくに古いしきたりなどにこだわっていたかは分らないが、こと門松については20世紀末期まで何ら疑問に思うことなく昔から言い伝を墨守してきたのである。そこには理屈ではない世界があるように思量される。門松にご飯を供えることの意味を知るに至ったのは、齢40の後半になってからである。

3

永らく疑問には思っていたが忘れ去っていたわが家の門松について思い返すに至ったきっかけは、ある仕事で上杉本「洛中洛外図」を眺めていたときであった。「左隻第三扇４」（82・３頁）には、室町通りの正月風景が描かれている。そこには屋根に届くような大きな門松がたてられていることが分る。この場面には16本の門松が描かれていて、うち２本は雲に隠れている。門松のうえを凝視するとそれぞれに白いものが載せられているように見える。しかも、左端の正月の祝福芸のひとつ春駒４人が通りかかろうとする町家の前の男の右手には箸が描かれ、箸には白いものが見える（『洛中洛外図大観　上杉本』小学館、1987年）。

快哉を叫ぶ、とはこのようなときを言うのであろう。他用で眺めていた洛中洛外図のなかに子供のころからの実体験が５百年ほどの時空を超えて直結したのである。これがご飯であることを直感的に確信したのである。同書の解説には正月飾りとして説明はあるが、門松のうえに何気なく描かれている白いものについて何ら触

れてはいない。恐らく解説者たちも気づかなかったのか関心がなかったからと思われる。

門松にご飯を載せる習俗は、湖辺の寒村の習俗だけではなかったのである。京都の習俗が伝わったものと見られるが、さて今度はこの意味についてどう考えるかについてはその後取り紛れお座なりとなったままであった[①]。

ところが、今年になって別の仕事を企図したことからこの門松について再び考え直してみようと思い立ったのである。民俗学の関係論文や辞典の類をにわか勉強してみたが、直接言及しているものは見当たらなかった。門松を立てるもとの意味に立ち戻って考えることが一番正論のように思われた。

門松について「本来は正月の歳神が祭場に降臨するための依代として設けられたもの」との指摘は、歳神（年神とも書くようだが、ここでは歳神とする）が年中の安全と豊作とを約束する神であることから建物のウチとソトを画する門口にそれを立てたことは至極当然の結果であった。この歳神は「家ごとに屋内に迎えて祭る」とあるが、わが家では歳神の話を聞いた記憶が全くない[②]。

素人考えだが降臨したと思われる歳神を依代そのもので饗応したのではないだろうか。「屋内に迎え」るとの屋内は、必ずしも建物のなかであることを必要とせず、その家その家のカド（屋敷内）でさえあれば事足りたのではないか。門（カド）は母屋の前の庭であり、福の神が来臨する祝祭的空間であったとの指摘は、母屋と前庭との境界に門松を立てたことの意味を考えていくうえで示唆的である（日本民俗文化大系12巻『現

代と民俗』小学館、1986年)。

母屋の前の門(カド)に依代である門松に供物としてのご飯を供えることによって歳神とともに年頭を祝ったのであろう。京都のような町家が向いあった大都市では、個々の門に歳神の降臨を頼むよりも町(チョウ)と町との通りに降臨を求めることにより町全体の祝福を求めることとなり得たのではないだろうか。したがって、門口に立てた門松のうえに供物としてのご飯を載せたのではないだろうか。

4

神棚には、産土神の志那神社と伊勢皇太神宮および今1躰祀られていたようだが想い出されない。神棚の前には注連飾り(裏白と譲り葉がつけられる)が張られた。そしてそれぞれの祭神のまえに燈明台(3本立てられるもの)とお三寸(みき)がおかれた。

夕景、6時ころ、カドの掃除も室内の掃除もすべて終え、一年の垢をおとすとて風呂へ入り身を清め(気持ちだけであろうが)たのち、神棚の燈明台の蝋燭に火をともし柏手をうって新年を迎えたのであった。これは当然のことながら父の役割であった。皎々とゆれる燈明のあかりは家族全員が無病息災でなにごともなく過ごせたことと、来るべき新年の平安を求めるような心地にさせ、今にして思い返すと随分神々しい感じのする一年の節目の時間であったように思われるのである。

ながし(台所)にも小さな神棚があった。何を祀っていたのだろうか。大峰山が祀られていたような気もするが定かではない。竈を使っていたときには、その真ん中に愛宕さんの護符が貼られていた。今1躰祀っていたはずだが失念してしまった。床の間には掛け軸(何であったかも失念)と三宝のうえに鏡餅をおき、その前に燈明台(3本立てられるもの)とお三寸を供える小さな銚子がおかれていた。

小さな家なのに随分たくさんの神さんを祀っていたものである。歳神が屋内に入れる余裕などなかったのではないだろうか。カドの門松で三カ日休み給うたのではないかと愚にもつかぬことを思い浮かべるのである。

5

1980年代なかばまで受け継いできたこの習俗は絶えてしまった。正月の習俗のなかで門松については段階的であれなくすことを勧めている研究者すらいる(櫻井徳太郎著作集9『民俗儀礼の研究』吉川弘文館、1987年)。しかし、これは余計なお世話というべきものである。各家で伝承してきたさまざまな習俗習慣の継承の是非は、当事者が決めることである。

いかに優れた習俗習慣であれ慣行であれ受け継ぐ人がなくなればそれが消滅の時期というものであろう。かたちだけを保存してもそこに住まいし受け継いできた人の心性が伴わなければそれは単に見せ物に過ぎないのである。まがいものは保存できてもホンモノはできないのである。

【註】

①門松を立てることについて「このこと田舎に始まりて、後に京師(みやこ)に移りしかば、後々までも、賤が門松と詠みたるなり」と、田舎で始められたことが都へもたらされたとする考え方もあったようである(喜田川守貞著、宇佐美英機校訂『近世風俗志(四)〔守貞謾稿〕』岩波書店、2001年)。なお、わが家では正月の門松や注連飾りなどは、4日の朝、父が片付け、15日の小正月に焼いていた。

②『国史大辞典』10、吉川弘文館、1989年。柳田國男も門松に対するこの作法(習俗)についてはまったく言及していないことが却って興味をそそられる(『柳田國男全集』16、筑摩書房、1990年)。

(付記)ささやかな想い出の記を執筆する機会を与えられた森隆男先生に深謝申しあげます。